世界を記した名もなき書。

篠原 ひなた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世界を記した名もなき書。

【Ｎコード】
Ｎ４３５７Ｆ

【作者名】
篠原　ひなた

【あらすじ】
時間が止まった世界で、鍵を探してさまよう鴉の物語。

0．ことのは

世界は、幾度となく終焉をむかえる。
刻まれていた時が凍り、
生きとし生けるものすべてが
深い深い眠りにつく。

終焉に導かれて汝は目覚め、旅立つだろう。
見果てぬ地、虹の麓、すべてのはじまりの地へと。

大いなる流れに言祝ぎを。
生まれ、滅び、また生まれいずる者たちに祝福を。
汝は、幕開けにして終焉。
終焉にして幕開けを司るものであるがゆえに。

【世界を記した名もなき書】

一・終焉と起源

昨日とも今日とも明日ともつかないある夜。
雨と雷が烈しさを増して止まない、ありふれた今のことだった。
稲光りが世界から黒と白のみを引き出した玉響に、時が凍りついたのは。
時は、自身のなかに生きとし生けるものすべてを飲みこんでいた。ついこの一瞬まで息をし、空気を震わせ、熱を放っていたすべての生きものたちは、今は静止し、深い深い眠りについている。
同じ今、鴉が目を覚ましていた。世界の片隅にうちすてられたかつての神殿。今は廃墟と化した大理石の破片にうずもれるように転がった、やはり大理石の鳥籠の中で、目覚めたばかりの鴉は声を聴く。

“時ガ凍ッタ。
汝ハ、鍵ヲ見出サネバナラヌ”

時が凍ったとはどういうことか、何が時を凍らせたのか、鴉は知らない。
ただ、凍った時をとかすには鍵が必要なのだということだけは知っていた。
鍵の形状も、在処も、捜し方すら分からないというのに、探さねばと鴉は思う。
それは、自分にしかできぬことだ、と。

“汝ハ、鍵ヲ見出サネバナラヌ”

脳裏に焼きついた言葉に導かれるように、鴉は鳥籠の扉の前に足を運ぶ。

堅く閉ざされていたはずの扉は、大きく開け放たれていた。
はやる心のおもむくまま、切られた翼をはばたかせる代わりに３本の足を動かして、鴉は白い扉を後にする。大小さまざまな白い破片の間をくぐりぬけ、幾重にも連なった檻のような廃墟を通りぬけたその先にあったのは、白と黒の世界だった。
世界はどこもかしこも黒々としていて、空をかける稲妻だけが白い。
その色彩が何より異様であることだけは、なぜだか理解できていた。
では本当の空は何色で大地は何色なのか、と首をひねった鴉は、だが想像することすらできないまま肩を落とすはめになった。
なるほど、時間が止まったとはこういうことか
納得するともなく考えて、鴉は歩き出した。

二・白と黒。

白と黒。

モノクロオムの世界は、静寂のただなかにある。鴉のほかに動くものはなく、吹きつける風さえ音を忘れ続けているのだからそれも道理だった。

静寂を乱すものはひとつしかない。鴉の足音だ。

その事実になんら感慨を持つこともないまま、右足を前に踏み出し、真ん中の足を踏み出し、そして左足を踏み出そうとして、鴉はハタと瞠目した。

右足を前に出したときよりも、垂直に伸びた石の連なりが遠くなっている。

なるほど。歩けば歩くほどに、視線の先に広がる景色が遠ざかりつつあるのだった。

奇怪な現象に首をかしげながらも足を速めた鴉は、吹きつける風が更に強さをましたことに辟易としてうつむいた。

考えるでもない。身体が後ろへ後ろへとおしもどされているのは、歩く速さより強く吹きつける風のせいだった。しかもたちの悪いことに、西へ向かおうとすれば東へ、東へ向かおうとすれば西へ、南へ向かおうとすれば北へ、北へ向かおうとすれば南へ、つまり進もうと頭に思い描く方向とはまるきり逆へ風は吹く。つまり鴉は、思い描いた方向とあべこべに動いていたのだった。

これでは、どこにも辿りつけないではないか。

焦りが、鴉の足を速めさせる。だが、速めれば速めるほどに前景は遠ざかり、鴉は風におどらされている我が身を呪うこととなった。そして、呪いながらも足を動かし続けていた。ここで立ち止まってしまえばいい、と鴉は思う。どこにあるともしれない鍵など探して

どうするつもりなのか、自分でもよくわからなかった。
にもかかわらず、歩いて鍵を見つけに行かなければ、という思いが鴉を動かしていた。

《ほおぅい、ほおぅい
どこに行きなさる小さきおひと》

どこからともなく響いた声に、鴉はびくりと身体を震わせた。
それは、鴉がはじめて聴く他者の声だった。

三．逆風と逆行。

あわてて見回してみた四方には、何も変わることのない世界が広がっている。
幻聴だろう、と鴉は笑い、止めてしまっていた足を再び動かした。
今度は少し頭を使って、尾羽の方へ進んでみる。
やはり頭の方へと流されて、鴉はァアとため息をついた。

『ほおぅい、ほおぅい。
そんなに風を好いていなさるのかね小さきおひと』

笑いを含んだ声がまたしても耳に届いて、鴉は仰天した。
もう一度、今度は先ほどよりも注意深く、辺りを見回してみる。
そこには、垂直にそびえる直線的な石の連なりや、真っ黒で硬い大地、そしてやはり真っ黒な天が在るだけだった。唯一見かけた生き物といえば、行列を作って行進中であったらしいアシナガアリたちだったが、ある者は白い欠片を、ある者は何かの羽らしきものを担いだまま、ぴたりと動きを止めている。彼らが声の主だとは思えず、鴉はとまってしまった足を、アシナガアリを踏まぬようにそっと動かした。

『ほぉうい。ほぉうい。
それとも風に好かれていなさるのかね、小さきおひと』

これで三度目だった。いい加減、空耳であろうはずもない。
鴉は気まぐれに、言葉を返してみることにした。
いらえなどあろうはずもないが、それでもかまわなかった。
進もうにも戻るばかり、八方塞がりなこの現状を打破する何かが欲しかったのだ。

「好かれているというならそうだろうさ。
どこへ向かおうにも風が向かいから吹いて進めやしない。
はた迷惑なことだ」

口にしてみれば、たしかにその通り、迷惑千番極まりない風のありように鴉はくつくつと笑った。
記憶にある中で、はじめての笑いだった。

『ほおぅい、ほおぅい。
そんなら離れりゃよかろうに小さきおひと』

返ってきた突拍子もない言葉に、嘴を閉じることができなかった。
そこに大気があるかぎり、風から逃れられるものか！
そう怒鳴りつけてやりたいような気もしたが、この程度の憤りではじめての会話を終わらせてしまうのは少々惜しく、笑い声を作って鴉は言った。

「そんな方法があるなら試してみたいものだ」

『ほおぅい、ほおぅい。
そんなら眼をつぶって口を閉じてくなんしょ』

意味するところを理解しがたい返答に首をかしげた鴉は、なにやら重くなる身体を感じた。
いや、これは足元からひっぱられているのだ、と恐慌をきたした頭が鴉に告げる。慌てて眼と口を閉じるが早いか、黒い体は土中へと引きずり込まれていった。

四．地底と暗闇。

身体を引きずる力が、唐突に消える。
すぐそばで渦巻きつづけているはずの風は、そよりとも感じられなかった。
それでいて、辺りに満ちる大気が澱みを微塵ももたない。
わきあがる疑念にせかされるようにして、鴉は目を見開いた。
そこには、果てのない闇が広がっていた。
どこをどのように引きずられてきたのかも判らない。
いつの間にやら口に入りこんでいた泥をようよう吐きだして、鴉はほうと息を吐いた。
それから湿り気を帯びた土の上にへたりこんだままの足に気づく。足を伸ばし顔を上げようとしたところ、頭をひどくぶつけることになった。

「すこぅしかがんで歩いてくんなせ、小さきおひと。
道が崩れてしまえば、わしはともかく小さきおひとは埋まってしまおうほどに」

唐突に、気配もなく響いた言葉の意味は、今度はすぐに理解できた。
鴉はあわてて身をかがめる。
地上に聴こえてきたそれと寸分違わぬ口調の主は、一筋の光もない場所でものの輪郭を捉える術などあろうはずもない鴉にはやはり見えなかった。

「そんで。
どこに行きなさるのかね小さきお人。
乗りかかった船なら最後まで。わしの庭ならどこへでも先導して

くなんしょが」

見えない声の主の笑みを含んだ声に、鴉は改めて気づいた。
どこへ、と明言できるような目的地を持っていないということを。

「凍った時間をとかす鍵のある場所を知っているか」

問いかけは、自身の耳にすら頼りなく届いた。

「そんな簡単な謎かけにてこずっていなさるのかね、小さきおひと」

ちょうどくちばしを向けていたほうから、くっくっと笑いながら遠ざかっていく足音が響く。
鴉は慌てながら、そろそろと後を追った。
天井や壁にぶつからないように気をつけながら、そろりと尋ねる。

「あなたには分かるのか？」
「わしはヒミズ。地の中で廻るもの」

答えにならない応えに、鴉は首をかしげ、そして存外狭かった道の壁に頭をぶつけることとなった。それでも、切られた羽の先で頭をさすりながら、鴉は笑う。
どんな姿をしているのかすら分からない、この相手の名前を知ったことが奇妙な安堵感をもたらしていた。

五．ものくろと光彩

まっくらやみを、ヒミズの立てる音を頼りに鴉は進んだ。
幾度も土壁に身体をぶつけてしまったが、道が崩れる様子は欠片もなかった。時間が凍りついているのは地上だけではないらしい。静止した土を動かすのは至難の業で、どうやら生き埋めにはならずにすみそうだった。
その土を、どんな魔法を使っているのかかき分けて進んでいるらしいヒミズは、それはよく喋った。

「時間が凍るなぞ、滅多になかろうことがね。
わしのじさまのじさまのじさまの
・・・とにかくずぉっと前のヒミズが……」

とめどもなく紡がれ続ける言葉は、どこか独り言のような響きを帯びていた。口を挟むこともできないような勢いのそれらを聞き流しながら、鴉は慎重に足を運んだ。何しろ、一筋の光も差さない闇の底のこと。いくら崩れてくる様子がないとは言え、土の壁に自ら進んで頭や身体をぶつけたいと願うほどの酔狂さは持ち合わせてはいなかった。それでもふと届いた言葉が、鴉から思考をうばった。

「知っていなさろう、小さきおひと。
そもそも、時間こそが忘却の源。
たとうるならほれ、未来永劫消えぬかと思うような悲しみの記憶、
そんから忘れたくないと叫ぶような喜びの記憶、
そういったものを時間は凍らせ、いずこかへ消し去ってしまうがね。
時間は本来、凍らせる側であって凍るものではなくんしょ」

耳に流れ込んだ言葉に、鴉はようやく事の重大さを知る。
凍らせる側が凍ってしまったのだ。
ならば、時間に凍らされて忘れ去られるはずのものはどうなる。

「だから、世界は色をなくしていたのか」

呟くともなく、鴉は言った。
それを合図としたわけでもなかろうが、ヒミズの言葉が止まる。

「地上はどんなところかね、小さきおひと」

ぽつり、と聴こえた言葉は、さきほどまでより随分と近くから響いた。

「ご承知のとおり、酷い風が吹いているよ。あやうく吹き飛ばされかけたくらいだ」

進まねばならない方向へ進ませてくれなかった風のことを思い、鴉はため息をつきながら次の言葉を待った。
けれどヒミズは、先ほどまでの立て板から流れる水のような言葉の奔流が嘘のように、何も言わなかった。
辺りに満ちた静寂に居心地の悪さを覚えて、鴉は思いつくままの言葉を口から紡ぎだした。

六．いつか、誰か

「どこまで行っても白と黒しかない。
白は限りなく真っ白で、黒は限りなく真っ黒だ。
すべてがありえないほど分かたれていて、居心地が悪かった」

声にすればするほどにありありと思い浮かぶ地上の光景の白々しさに、鴉は身体をすくませた。居心地の悪さはあまりに対照的な色彩によるものではなく、忘却されずにただよう記憶の残滓によるものであったのかもしれない。
それらが、自身のまわりに重くまとわりついているようにも思えて鴉は首を横に振った。確証は無い。

「そうかね。時に、そうなる前の地上はどうだったのか、覚えていなさるか？」

のんびりと、鴉の様子に気づいた様子もなく、次の問いが前方から戻ってきた。
ヒミズとの距離が少し遠ざかっていることに気づいた鴉は足を速めた。
そうして土をかくような物音がかすかに聞こえてきたところで先ほど投げかけられた問いの答えを自分の中に探した。
土が入らないようくちばしは閉じたまま、しばらく探してみて愕然と眼を見開いた。

「いいや…全く覚えていない」

うめくように鴉がこぼした声は、土くれにすい込まれたのか響く

こともなく消えた。
思い出しうる限りの記憶を、鴉は辿ってみる。
確か、鳥籠の中に居た。
そこまでは思い出せるのだが、その前がどうにも遠い。
これは大事ではないのか、と慌てかけた鴉の耳に届いたのは、そっけない相槌だった。

「そんなものでがしょうなぁ」

よくあることなのだろうか、と鴉は首をひねった。
ひねりながら、思い出した一番はじめの記憶は、まどろみの中。
確か、声が言ったのだ。

“時間ガ凍ッタ。
汝レハ、鍵ヲ見出サネバナラヌ”

だがあれはいったい、誰だったのだろうか。
白い大理石の鳥籠。
その扉は開いていた。
しかし、いつ自分は鳥籠に入れられたのだろうか。
この切られた羽にしてもそうだ。
いつ、誰が、なんのために・・・

七．あり、ない。

「ときに、白と黒とはどんなものかね」

先ほどよりも遠く響く声が、足を止めて考え込んでいた鴉を地の底の現実へと引き戻した。ヒミズが先へ進もうとして立てる物音は、鴉のそれより万倍も小さい。この闇の中に1羽きりで取り残される恐怖にせっつかれ、鴉はあわてて3本の足を動かしはじめた。

そうして、ヒミズに前と同じ程度の距離まで近づいたことを確信してから、改めて問いかけを反芻する。

どんなもの、とは、どういうことだろう。

意図が理解できなかった。

これもまた、ヒミズ一流の話術なのだろうか。

だとするならば、どの様に答えようが戻ってくるのは揶揄でしかないようにも思われた。しかし、尋ねられたことに適当な答えを返すことができるほど低い自尊心を持ち合わせているわけでもなかったので、鴉はさんざん頭を捻ったあげく、結局は直感的に導き出した説明らしきものをくちばしの先にのせることになった。

「白も黒も、ご存知の通り色の名前だ。白は…すべてを突き放してなお冷たく、それ故に美しい。確かにそこにあるが、どこにもないように見える」

そこまで一気に喋って、鴉は前方を気にするように見やる。もちろんヒミズの姿は見えず、闇が広がるばかりだった。地下に引き摺り下ろされてから屈めつづけている腰が少し痛んで、鴉はため息を一つつく。あとどれほど歩けばよいのだろう。

憂鬱な気分を追い払う意味も込めて、ままよ、と鴉は続けた。

「黒は…、この世界に満ちる闇に似て…いや、違う。この世界の闇は、いろんなものが混ざって動いてゆく感じがする。だが、あの黒は…」

八．連なる孤独。

もったいぶりたくて言葉を切ったわけではなかった。
鴉が視てきたのは、地上の一部も一部に過ぎない。地下もまた然り。
にもかかわらず、双方を較べる不遜を考えてのことだった。
鴉が口を閉ざしたことで、土の壁にこだましていた声もまた、消える。
地下の、道とも言いがたい土のトンネルに、一匹と一羽の足音だけが残った。不思議なことに、ヒミズが何かを言う様子もない。
シャリシャリと土をかく、かすかな音に遅れぬよう、鴉はただ足を進める。
闇の中の沈黙は重く、逡巡は長く続かなかった。

「あの黒は」

息をすうと吸い込んで、鴉は一息に言葉を紡ぐ。

「何も受け入れず、働きかけもしない。ただそこにあるだけのものだ。その潔さ故に美しいが…絶望的に哀しい」

意味を十分に理解した上で語った、とは到底言えない言葉だった。
分からないという返事を予測して、首をすくめる。
だが、ヒミズのいらへは鴉の予想とはかけはなれていた。

「色、とはどんな音がするものかね」

呆気にとられて鴉は首を傾げ、またしても土の壁に頭をぶつける。

どう控えめに見積もっても泥だらけの体だ、構うことはなかろう。
開き直った鴉は、続いて届いた言葉に不可解さをつのらせることとなった。

「それからどんな臭いがするものかね？
触り心地はいいかね？」

音、とはどういうことだろう。
鴉はただただ混乱した。
そもそも色は、見るものであって聴くものではない。ましてや、臭いをかいだり、触ったりできるものであろうはずがない。
そこまで考えて、ハタと気づく。

九．盲目の視界。

「眼が見えないのか？」

他者と触れ合うことに慣れない鴉のぶしつけな問いに、ヒミズはあっさりと肯定の相槌を返した。どこか決まり悪さを覚えて頭をかいた鴉に気づいているのかいないのか、笑いすらにじむとぼけた口調がそれに続く。

「すると小さきおひとがおっしゃったは、見るとかいうことでしか分からないもの、ということになろうなぁ」

その言葉が鴉をむっとさせた。

闇の向こうでヒミズが、その姿を一目たりとも見たことがないにも関わらず、己をせせら笑っている様子が眼の裏に浮かぶような心持ちさえして、感情のままに言葉がくちばしからほとばしる。

「いいや。まだ言ってなかったことがあった。

地上は、ここと同じくらいの寒さだったがここより湿ってはいなかったよ」

自らの言葉に引き出された、凍てついた大気が忍び寄ってくるような心もちが、鴉の身体をぶるりと震わせる。実際、鳥籠の中で目覚めた時にはすでに指先まで冷え切っていた鴉は、立ち上がるまでにたいそう苦労したのだった。

実は地下のこの湿り気のある土の中のほうが風が吹いていない分だけ暖かいような気もしたが、そんなことを言うのは何か癪で、鴉は口をつぐんだ。

「そうかね」

鴉の様子に気づいた風もなく、ヒミズは変わらぬ口調で返した。
どこにもぶつけようのない、何かどろどろしたものが胸に重く、鴉は俯いた。

「そんなら、太陽も凍ってしまったろうなぁ」

別に鴉に聴かせるつもりではなかったのだろう。
もごもごとした口調の言葉は、だが土にすとんと吸い込まれる前に鴉の耳に届かぬほど小声ではなかった。

「たいよー、とは何だ？」

聴きなれない音の響きに、鴉は戸惑う。
浅い記憶を探っても、何も思い出せはしなかった。たいしたことではないのかもしれない、と考えながらも鴉は答えを求めていた。
ひとたび抱いた疑問は、ほうっておけない性質であるらしい。

「そうさなぁ、わしもよくは知らぬがなぁ」

ヒミズの声音には、鴉の問いを歓迎しているとは言いがたい雰囲気がにじんでいた。

「こわきもの、とはおじいのおじいのそのまたおじいの遺言でな。わしらは眼が見えぬで、その姿を見たものはおらぬが。なにしろ見たものは皆死んでおる。そういうものさなぁ」

分かったようで分からない気分で、鴉は成程とだけ返した。
ヒミズの謂いをその通りに受け取るならば、「たいよー」は随分

と恐ろしいものであるらしい。凍っていたのは自らにとっても僥倖だったのかもしれない。だとするならば、これ以上知る必要はあるまい。

そう考えた鴉は、先ほどからずっとあたため続けていた疑問をくちばしの先にのせることにした。

「そういえば、私たちはどこへ向かっているんだ？」

十．地底の落下。

「どこへ、とおっしゃるか、小さきおひと
また、おかしなことを言いなさるものさなぁ」

くぐもった声でヒミズが笑った。
首の後ろにむずがゆさを感じて、鴉は眼を細める。だが視界に広がっているとらえどころのない闇のあまり好きにはなれそうにない雰囲気と、すぐにも眼に入ってきそうな砂粒に、元のようにまぶたを下ろした。手探りで歩かざるをえない今、眼を閉じない理由など一つもなかった。

「わしの庭ならどこへでも、とゆうたとおりに参りましたがなぁ」

いつの間にか鋭敏になった聴覚がとらえた何のてらいもない声音に、鴉は安堵する。
わしの庭、とヒミズは言う。そこには、この地下の世界をよく知っているものでなければかもしだせもしないような説得力がにじんでいた。だからこそ、鴉は安堵したのだった。あてどもなくさまよい、風に流されていた地上でのことを思えば、泥だらけになるくらいどうということもなかろう、と。果てもなく歩いているような閉塞感を振り払った鴉は、取り戻した希望も明るく踏み出す足に力を込めた。
その足が再び土を踏んだ、その瞬間だった。足元の土が崩れたのは。

「小さきおひとは、わしより重かろう。なれば、そこは通れぬなぁ」

耳を打つ嘲笑の禍々しさに、鴉は眼を見開いた。ヒミズの言葉を

ゆっくりと噛み砕いてからようやく理解した頭がうなる。
まさか、騙されたのだろうか。こんなにも簡単に。
その間にも、身体は垂直に落ちはじめていた。
足をかける場所もなく、切られた翼は羽ばたきもしない。落下を止める手立ては何一つなかった。できる限りの力で土塊をつかんでみたものの、これまでちょっとやそっとの力では動かなかったことが嘘のようにつかむそばから崩れてゆく。叫ぶ余裕など欠片もなかった。
土塊や何か硬いものが当っては、先に、もしくは共に落ちていくのが感じられて、鴉は闇ばかりしか映さない眼をつぶり直した。土が入らないように、と考えてのことだった。身体は、今や先ほどの歩調よりも早く動いている。動かない翼を鑑みるまでもなく着地などできよう筈もない。
走馬灯が、脳裏をよぎった。
鳥籠の中を、白黒の世界を、逆流する風を、聴こえた声を、地下の闇と温もりを・・・これまで感じたありとあらゆるものを、とてつもない速さで映し出しながらあふれる記憶は、鴉の身体を襲った衝撃によって途絶えた。

十一・地底の地底。

最初の衝撃は、覚悟していたような痛みではなかった。
ずいぶんとやわらかい何かが鴉をふんわりと受け止め、そして宙に弾く。
ぽぉぅうりと身体が舞いあがり、そしてすぐに落下した。
次いでぶつかったのも、やわらかくしめった何かだった。いくらやわらかいとは言え、頬やらわき腹やら、とにかく身体全体をしたたかにうちつけた鴉は悶絶した。痛みが少しずつ薄くなり、やがて遠ざかるまで、投げ出された体勢そのままで転がっているしか術はなかった。
なんとか呼吸ができるようになってからなにげなく眼を見開こうとした鴉は、その瞬間に悲鳴を上げた。とっさに、切られた翼で眼を覆う。闇の内にあった身には耐えがたいほどの明光が、辺りに満ちていたが故のことだった。
うずくまったまま動けない体の中を、思考が音をたてて廻る。

今見たのは、何だ。

限りなく白に近い青色。
白に似て白ではなく、かといって黒とは到底呼べない色の灯りに照らされた世界。
地上には……時が止まったあの地には、決して存在しえない色だ、と鴉は思う。
思いながら、痛みが遠ざかった眼を慎重すぎるほど慎重に少しずつ開いた。
辺りは、燐光を発する苔に覆われていた。
鴉を救ったのは、この堆く重なった苔の柔らかさであるらしい。
まだチカチカする眼をしばたたかせながら、ぼんやりと辺りを眺

める。
相も変わらず湿った空気に包まれたその場所は、鴉がその身体をかがめずに立っていられるほどには広い。
何の気なしに見上げれば、そこを落ちてきたのだろう、暗く先の知れない穴がぽかりと開いていた。
羽ばたけない鴉には戻りようがない道だった。

「ヒミズ！」

これはいったい、どういうことだ。
衝動的な問いかけを、鴉は途中で止めた。
初めて出したようにも思える大きな声が、まるで自分のそれではないかのように辺りに何度もこだまする。
あの穴の向こうに、まだヒミズはたたずんでいるのか、それともいないのか。
考えかけて、ヒミズの名を呼んだのはこれがはじめてだ、と鴉は気づいた。
二人で歩いている間、ヒミズもまた、鴉の名を呼ばなかった。単なる偶然と片付けてしまう気にもなれず、鴉は立ちすくむ。
そよとも風の吹かない地底を、得体の知れない寒気が覆いはじめたような気分だった。
目の前の苔の光さえ、どうにも恐ろしくてやりきれず、鴉は身を震わせた。
逃げ場を探して振り向いた背後に、身をかがめれば通れるだろう穴を見つけ、ひねった首をそのままに後ずさりで穴に向かってひた走る。
この場所から逃れなければならないという思いだけが、その身体を動かしていた。

十二．ねむりへのいざない

駆けるとは言いがたい速さで鴉は駆けつづけた。
穏やかな灯火を辺りに投げかけていた苔はもうどこにも見当たらず、辺りは闇よりもなお暗い。
闇になれた眼をもってしても何一つ視ることのできないほどの暗がりの中、それでも道は……それを道と呼ぶことが相応しいのか鴉には分からなかったが……どこまでも続いているかのような顔で目の前にあった。
混乱に翻弄されるがまま、３本にの足で湿った土をかいて前へ、前へ。
硬い石や湿った土塊が体にぶつかってくることを気に留める余裕もなく、鴉は進んだ。進んでいるのか、戻っているのか、そもそも何処へ向かっているのかも分からないまま。
鴉の頭にあるのは、唯一つ。あの灯りから遠ざからねばならない、という脅迫にも似た観念だった。
ふ、っと足がもつれて、鴉は転んだ。途端、絶え絶えの息をなんとか繋いでいた観念が遠ざかり、崩れ落ちた体に疲れだけが残った。
ぜいぜいと咽喉が痛み、おこりにかかったかのように全身が震える。
うずくまったまま息を吐き、そして吸おうとして激しく咳き込んだ。
ようよう咳がおさまった頃には、静寂が辺りを包んでいた。
地下の、さらに地下。ひとすじの光も射さない闇の底。
聴こえる音は一つもなく、見えるものは何もない。

何も見えない世界に、何があるというのだろう。
何も聴こえない世界に何が、そんな場所を歩き続けることに、どんな意味があるというのだろう。

虚無感に、鴉は眼を閉じた。
まぶたの裏に浮かぶのは、先ほどの走馬灯。
鳥籠の扉、白と黒の世界、逆流する風、地底からの声、ヒミズの言葉……。
ヒミズに会いたい、と鴉は思う。
会って、何を考えていたのかを知りたい、と。
けれどその術は見出せず、闇の中で鴉は啼いた。

「誰か、いないか」

啼き声は、少しも響かなかった。無論、いらへもない。
冷めた顔で鴉は嗤う。
この暗闇に、誰が居ると言うのだろう。
居たとして、己の問いかけに誰が答えてくれるというのか

“時ハ凍リ、生キトシ生ケルモノハスベテ眠ッテイル”

ふと脳裏に浮かんだ声に、鴉は首をかしげた。
では、ヒミズはどうして起きていたのか。
投げかけた問いに、答えはなく。鴉はうずくまったまま、考える。
そもそも、ヒミズは本当に居たのだろうか。
実は私も、凍った時の中で眠っている多くのうちの一つに過ぎないのではなかろうか。だとすれば、この暗闇は夢なのだろうか。

ぐるぐると、血潮の代わりのように渦巻く思考に、鴉は眠気を覚えた。
いまだかつて感じたことのない感覚であるにも関わらず、それが眠りへの誘いであることを鴉は知っていた。どこか深いところで。
逡巡する間もなく、こくりと頭が揺れはじめ、揺れるたびにどこ

かでくっつけてきていた土塊がわずかばかり落ちる音が聞こえた。
やがてそれも遠くなり、鴉は眠りについた。

十三．まどろみの涯：羽化

この上なく危険で、そして安穏とした場所だった。
細くたおやかな糸によって紡がれた防壁の内側。
意識はただ、温もりや、優しさや、とにかく奇麗なものばかりを甘受しながら、まどろみの世界の中に在った。
にもかかわらず、外界に関する全ての情報は揃っている。
太陽は近すぎず、遠すぎず。
甘い甘い蜜や朝露や、この身を狙うものたちでさえ、きららかに唄う。
光に満ち、それゆえに影の濃い世界だ。
未だ触れたことなぞあるはずもないそれらの近しさに、いつか触れたことがあるようなそれらの遠さに、意識は笑った。

そう。
目覚めるには、頃よい時分だ。

言葉は、奇妙なまでに鮮明に響く。
この暖かく安らぎに満ちた繭から出るときが来たのだ。
永劫のような時間をかけて、まどろみから遠ざかる。
小さな穴を開けるまでに費やした時間はいかほどか、計ることはできなかった。
射しこむ光が、熱く肌を焼く。
剥離してゆく優しい世界の残像が目に焼きつくことはなく。
今まで触れたことのない、けれどどこよりもよく知っている世界の輪郭が明確になるのを感じた体が震える。
外気は、強烈なまでの印象を伴って世界に君臨していた。
さらに途方もない時間と見果てぬ努力の先で白い防壁に十分な亀裂が入った頃には、疲労と言い様のない昂揚が意識を満たしていた。

そうだ外に出るのだ

それだけを頼りに、薄い羽根をなぶる風に耐える。
痛みに慄きながら、外に出ることへの希求が体をせかした。

そうして、たしかに光がそこにあった。
草いきれに息をはずませ、見回す世界は広く。
遠く根をはる樹木の唄は高らかに高らかに。

あぁ、これからここで過ごすのだ

安堵と不安と期待がないまぜになった感覚に、胸と羽根をそっと震わせる。
瞬間。
激痛とともに、はじまったばかりの世界は終った。
薄れ行く意識の中、舞い上がる身体と、遠くなる大地を知る。
この上なく美しい緑が、視界の全てだった。

十四．まどろみの涯：喫飯

夜明けが、細かな水滴が羽根に纏わりつくような感覚と共にやってきた。

こんな日は、大地すれすれに飛ぶほうが収獲がある。誰に教えられたわけでもなく、意識はそれを知っていた。母も、その母も、そのまた母の頃からそうだったのだという。知識というよりは本能に近い感覚は、一族であれば備わっていて当然のものでもあった。

研ぎ澄まされた感覚に、小さな影が届く。近づくのも、捕えるのも、そう難しいことではなかった。翼が少し泥で汚れたが、そんなことは今気にすることとも思えない。

まずは、食事を確保せねばはじまらないのだ。

子どもたちが、お腹をすかせている。

育ち盛りなのだから、もっともっと、食事を運んでやらなくてはならない。

明日は空から水が降るだろう確信がある今ならば尚更。

ひとたびあの水たちが降り注いできたならば、もはや小さくて味の深いものたちを捕らえることはできないだろう。

なんとしてでも陽が高くあるうちに、いつもよりも多く食べさせてやらなければ。

あせる気持ちをそのままに、風をきる翼が鳴った。

眼を凝らした意識の先。

細い緑の間の白い繭の横で、薄い羽根がキラリと光る。

居た。

一瞬で、あっけなく嘴におさまったそれを銜え、高く高く舞い上がる。

かすかに震えたそれは、時をまたずして静かになった。
この大きさならば、子どもたちの飢えをひと時なりとも満たしてやれるだろう。
はずむ気持ちをそのままに、風の唄に身を任せる。
さぁ。帰るのだ。
そのときだった。
衝撃が、体を貫いたのは。

嘴が、勝手に開いた。
せっかくのご馳走が落ちてゆくのを悟ったころに、身体もまた落ちはじめていた。
大きな音が響き、たたきつけられた身体が、動きを忘れてはねる。
何が起きた。食事を、この虫を運んでやらねば。こんな痛みは知らない。どうすればいい。
思考が暴走する頭に響いたのは、天敵の声だった。

バウ！

耳慣れない響きを最後に、音が消える。
四つの朝と夜しかしらない子どもたちの顔を思い浮かべた瞬間に、世界は終った。

十五．まどろみの涯：響唄

はじまりの記憶は、雨のなかにあった。

＊＊＊

体を隠すような場所もなく、隠すだけの体力もなく。
おわるのだ、と思いながら、意識はうずくまっていた。
たたきつける水の粒に、ぬれそぼったからだがヒリリとうずく。
意識を生につなぎとめているのは、生きなければ、という執念にもにた欲求ただそれのみだった。
ピクリ、と耳がふるえる。
とまらない水音の向こうがわから、何者かが近づいてくる気配を感じてのことだった。
逃げるための力は、とうの昔についえていた。
気づかれぬよう息を殺したのもつかの間、投げかけられた奇妙な響きに、意識は終わりを覚悟する。
この臭いを知っている。二つ足の生きものだ。仲間を殺し、食べるでもなく去っていったあの生きものの仲間だ。
ならば己も殺されるのだろう。そう思うのは、極自然なことだった。
唐突に、冷えきった体には灼熱にひとしいぬくもりに頭をふれられて、意識はうなりを一つこぼす。
些細すぎる抵抗にひるむ様子もなく、ぬくもりは意識を空に持ちあげていた。あばれる間もなかった。

連れていかれた先は、乾いた木が燃える臭いのする場所。
朦朧とした感覚のなか、乾いた布の上に横たえられたことを知る。
ひとしきり体についた水滴をぬぐわれ、次には口をこじあけられて

暖かいものを流しこまれた。弱々しく牙を立ててみたものの、黄色い血が流れても二本足のいきものは止めようとはしなかったので、意識は甘んじてそれを受けざるをえなかった。抵抗を重ねるだけの力は、まだ残っていなかった。

危険だ、と体が言う。歩けるだけの力が戻ったらすぐにでも逃げなければ、とかすむ頭で思っていた。

その時だった。

唄が聴こえた。低い声だ。一瞬だけ、世界が鮮明になる。

昔、そうだったように。全ての音が聴こえ、すべての光が見えた。

うすく目をあけてみれば、薄黄色ににごった視界のなかで、二本足のいきものが唄っていた。

仲間と連絡をとるときにするようなそんな唄ではなく、奇妙に静かな…毛を優しくつくろわれていた頃を思いだすような唄だった。

いきものの前足から、血の臭いがする。

この牙が、あの傷をつけたのだと思うと、どうも居心地が悪い。

なぜだ。なぜ、そんなことを思う。

「　　」

伸ばされた前足から、逃げることはきっとできた。噛みつくだけでもよかった。

「　　」

喉元を撫でられて。眼を閉じた。命取りだ、と身体が言う。

けれど、二本足の生きものはそれ以上何もしなかった。ただずっと唄いながら意識の喉をなでていた。

次に目覚めたときにも、二本足の生きものは唄っていた。唄いながら、意識に食事を与え、やはりその喉をなでた。

逃げる気は、いつのまにか消えていた。

助けられたのだ、と気づいた。その時に、意識は二つ足の生きもののものになった。

＊＊＊

眼を開けても、世界は真っ暗だった。
むせかえるような土いきれと、血のにおい。
雨が降らないことに、救われた気がした。
何が起きたのか、考えるまでもなかった。
いつものように、あの生きものと狩に来た。空から落ちた獲物を銜えて、あの生きものの元に帰ろうとして。
そして・・・

何か、ひどく不快なにおいがした。
耳をふせたくなるような、高い音がする。あの生きもののいる方からだ。
近づくにつれ、かぎなれた臭いが強くなる。
なぜだ。これは、あの時の、あの生きものの血のにおい。
そのそばにかけよろうとしたその瞬間に、灼熱が身体を焼いた。

「　　」

嫌な、においがする。
あの生きものと一緒にいるところを何度もみた、二本足の生きものが、たくさん。

「　　」

血のにおいがする。
意識は大地を蹴って飛び掛った。

あの生きものに、何をした！

「　　」

灼熱が、何度も身体を焼く。

食いちぎった肉は、あの生きものがくれたものよりずっと不味い。

「　　！」

「　　！！」

意味の分からない音の羅列は、怒号だということだけが分かった。

爪を振りかざし、牙を立て、何度も吼えた。吼えて吼えて吼えながら、爪を振るう。

灼熱。土いきれ。震える空気。

二つ足の生きものの方が、多かった。動けなくなった身体に、突き刺さる熱。

「　　」

遠ざかる足音が、荒々しく響く。視界はもう、霞んで、見えない。生きなければ。その衝動に襲われる身体は、あの生きものの吐息が聞こえないことに気づいていた。

あの唄は、もう聴けない。あの優しい空気は、もうどこにもない。思う間にも、世界が遠ざかっていくのを感じた。痛みも、もう感じない。鼻も駄目になった。耳もだ。

それなのに、唄が聴こえた気がして。あの二本足の生きものが、唄っているような気がして。意識は眼を閉じた。

あの、小屋のなかでそうしていたように。

十六・逢瀬

夢は、とどまることなくうつろった。
鴉もまた、羽虫としての、鳥としての、犬としての、人としての生を、いくどとなくくりかえした。現実かと惑うほどの鮮明さに鴉はうろたえ、やがて受け入れることを覚えた。
そうして、数限りない生を経た・・・風として水として土として生きつづけたその果てで、鴉は唄を聴いた。どの夢でも耳にしていた、どの夢でも耳にしなかった唄を。
遠く、すべてをつつんであまりあるような光に包まれながら、鴉は気づく。

そうだ。
あの唄が、この光だ。
そして、この光こそが、タイヨーなのだ。
直観的に鴉は理解する。

ヒミズの言葉に感じたような恐怖は、かけらもなかった。
ただ、夢にたゆたっていたすべての神経が、張りつめたまま動きをとめてしまったような気分だった。そんなおかしな感覚をどこかへやってしまいたくて、息を一つつく。
その時も唄は、タイヨーは鴉をつつんでいた。
まるで隣に腰をおろしているかのような身近さで。

『あなた』

不意に、本当に何の前触れもなく、声が響いた。
鴉はうろたえ、辺りをきょろきょろと見回してみる。

光の中に、生きものの気配はない。もやがかったような白さばかりが、どこまでも続いている。その白さに、体がとけてしまったような不安に、鴉はおびえた。得体の知れない声よりもよほど、意識をとどめる器がないことが、恐ろしくてならなかった。

『また、ここにたどりつくのね』

くすくす、と。笑うような声が、鴉を恐怖から引き戻した。
今さら、鴉は理解する。この声が、夢の中で耳にしたどの声とも違うことに。夢の中で耳にしたそれらは、どれも意味のわからない音だった。けれど、この声は言葉として届く。

『あなたは、いつもそうね。返事をくれた試しがない』

聞きおぼえのない声だ、と鴉は思う。
記憶のはじまりに聴いたあの声でもなく、ヒミズのそれでもない。いぶかしさを隠せないまま、つい今しがた声が響いた方角に、つまり声の主がいるはずの場所に目をやる。どうせ、真っ白な世界が続いているだけだろう。そんな投げやりさは、あっけなく裏切られた。
広がっていたのは、これまで見た夢に出てきたすべてをごちゃまぜにしたような、混沌とした世界だった。夢の記憶を信じるならば、その混沌とした世界に悠然とたたずんでいるのは白い兎。

『ハジメマシテ、になるのかしら』

呟きのような口調は、耳をすませるまでもなく響きつづけている唄そのもののように鴉に届いた。それだけで、逆立っていた羽毛が、元の場所におさまる。あまりに唐突に現れたこの兎に、けれど警戒

すべき理由は何一つないような気がした。
　鴉が緊張の糸をゆるめたのを感じとったのか、兎が笑う。さえざえとしたほほえみは、何よりも優しく、鴉はすべての憂いを忘れた。
『鴉。あなたと逢えるのを、楽しみにしてきたわ』

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4357f/

世界を記した名もなき書。

2010年10月8日16時11分発行